地域の子育てサークルとオンライン育児関連サイトのネット掲示板における親の子育てに対するサポートの比較

狩野 かおり* 無藤 隆**

本研究の目的は、地域の子育てサークルとインターネット上における育児期の親同士のネットワークがサポートを提供する場としてそれぞれどのように機能しているのかを比較検討することであった。そのために、地域の子育てサークルに所属する親メンバー307名とインターネット上の育児関連サイト内のネット掲示板を定期的に利用している親217名を対象として、親子の属性やネットワークの利用動機、現在の身近なサポート環境および親や個としての心理的健康、そして利用しているネットワーク形態がもっていると思われるサポート機能について尋ねる質問紙およびオンライン調査を行った。その結果、地域の子育てサークルとインターネット上の育児掲示板という二つのネットワーク形態を比較した時に、育児サークルの方は、子育てをある程度経験した親が既存のネットワークを広げる目的で参加し、コミュニティ的な支え合いや、親子同士の交流を通じた親や個人として視野の広がりを経験する機会を提供する場として特徴付けられるのに対して、インターネット上の育児掲示板は、育児経験の浅い親が育児情報を手に入れたりよその親の子育ての様子を知りたいというニーズを満たすために利用し、親としての自分を客観的に見つめ直し育児にゆとりを持つ機会が得られる場として捉えられていることが示唆され、当初の仮説がほぼ支持される結果となった。

問題と目的

子育てに対するネットワーク的なソーシャルサポートをいかに充実させられるかということが極めて重要な課題になっていると思われる現在(三沢、1997)、近代化によって崩壊しつつある自然発生的な親のサポートシステムを補完するものとして、近年、子育てサークルの活性化が地域での子育て環境作りの一環として注目されている(結城、2001)。しかしながら、一方では、そのような育児支援ネットワークが一部の親だけにとどまり、なかなか広がりが持てないことが指摘されており、その理由として、育児サークル情報の広まりにくさや、多くのサークルが平日に活動しているといった時間的な問題（神田・山本、2001）の他に、高橋（1997）は、現代の親たちがプライバシーの確保を求める傾向にあることを指摘している。このような従来の育児ネットワークにおける問題点を打破する可能性を持った新たなネットワーク形成の手段として、近年、育児支援の専門家やメディアの間で注目を集めているのが、オンラインの育児掲示版に代表される、いわゆるインターネット上での子育てグループである（e.g., 高祖、2001；鈴木、2001)。

地域の子育てサークルとオンラインの育児掲示板は、サポートが提供される場としての形態は異なるものの、それらをソーシャルサポートが提供される世帯外の育児ネットワークと捉えるならば、両者にはソーシャルサポートがもつ、「ストレスの悪影響を緩和し、個人の精神的・情緒的安定を促す機能」(北川・七木田・今塩屋、1995）が見られるはずであり、そうなれば、ネットワークからのサポートによって親の心理的健康がポジティブな影響を受けるというおおまかなサポートのプロセスは、二つのネットワーク形態に共通するものであることが考えられる。

とはいうものの、育児ネットワークの利用がどのような動機から発生しているのか、育児ネットワークからのサポートとはつまり何についての援助なのか、そしてサポート受けることによって親の心理的健康のどのような側面が影響を受けるのかについては、それぞれのネットワーク形態の特徴による違いが生じること

* お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター　** お茶の水女子大学子ども発達教育センター

が予測される。つまり、子育てサークルが同じ地域に住む親子が定期的に集まり遊びなどの活動を通して相互交流する場であるのに対して、オンラインの育児掲示板は地域や時間の枠にとらわれない、文字による親同士のやりとりをその目的としているといったそれぞれのネットワーク形態の特徴が、利用者の動機、各形態が有するサポート機能、そして作用する心理的健康の側面を規定していることが考えられる。

広野と山中（1996）は、育児雑誌の悩み相談や投稿ページの人気の高さや手紙による育児相談の増加、そして単に利便性を満足させるものから考える手段へと移行してきた近年の電話相談の傾向などを例に挙げ、現代の子育てにおいて、誰もが同じ悩みを持っていることを確認し、自分の子育てや生き方に自信を持ちたいという意識が高まっていることや、日々の育児から一時でも離れて自分に立ち返る時間を持つことへのニーズが強くなっていることを指摘している。インターネット上の育児掲示板が電話と同じく効率や利便性を重視した通信手段を用いたものであり、それが育児雑誌と同様に利用者による投稿から成り立ち、そこで手紙相談のように文字でのコミュニケーションが行われていることを考えると、ネット掲示板は現代の親が求める「内省化のための時間と機会の確保」と「地域を越えた他者とのつながり」（広野・山中、2001）を提供する場として主に機能していることが仮定できる。

この仮説を支持するものとして、Joinson（2003）は、Cummingsらによるオンラインのソーシャルサポートに関する未発表の研究においてインターネット上のサポートグループに参加している人の53%がグループに参加することの利点の一つが「自分だけではないと感じられること」であると回答したことを挙げ、人数が大規模であるオンラインのネットワークでは社会比較をする対象を容易に見つけられることを指摘している。このようなはたらきをもつネット掲示板においては、他者の悩みに共感したり自分の悩みに共感してもらい、「自分だけではない」という安心感をもつことによって、また自分のあり方について考えを深めることを通して、自分の子育てや生き方に自信を持てるようになるのではないかと考えられる。

その一方で、地域の親子が集まりメンバー主体の活動が行われる子育てサークルは、親の仲間作りができること、そして色々な親子をみることにより子どもとの関わり方が自然に学べるといった子育てについての「学習の場」が作れること（原田、2000）をその主なサポート機能としていることが仮定できる。この仮説を裏付けるものとしては、情報交換や地域の友達ができたことが子育てグループ活動の利点であることが見出された、中村（2001）や日本小児保健協会（2000）による子育てサークルについての調査結果が挙げられよう。このように、育児サークルに参加し、その場が提供する密接な人間関係に身を置くことで、孤独感が軽減されたり対人関係のもち方に自信を深めたりなど、自分と周りとの関わりをポジティブに捉えられるようになると思われる。それだけでなく、子どもとの関わり方についてのモデルを数多く目の当たりにすることで子育てのスキルが習得され、その結果、育児に対する効力感が高まったり、良好な親子関係の育成が促進されるのではないかと考えられる。

以上の点をふまえて、本研究では、地域の育児サークルとオンライン育児サイトのネット掲示板におけるサポートについて以下のような仮説を立てた。すなわち、ネット掲示板の利用は主に他者の様子が知りたい、育児情報が欲しいという動機によって生じ、利用者はオンライン育児ネットワークにおいて、地域を越えた他者との交流をもつことによる「自分だけではない」という安心感や自己の内省を体験し、それによって親としての自分や親役割を離れた自分について肯定的に捉えられるようになったり、自分の子育てに自信をもつことができるようになると思われる。これに対して、子育てサークルへの参加は主に育児情報へのニーズや自分の仲間が欲しいという動機によって生じ、メンバーはサークルにおいて育児スキルの習得と密接な仲間関係を経験することによって親子関係や対人関係を肯定的に捉えられるようになったり、自分の子育てに自信をもつことができるようになると思われる。

この仮説を検証することを目的に、本研究では二つのデータサンプル（i.e., 地域の子育てサークルに参加しているメンバー及びインターネット上の育児関連サイトにあるネット掲示板を利用している親）に対して質問紙調査を行い、それぞれのデータプロフィールについてグループ間での比較を行った。その結果をふまえて、本論文では、それぞれの育児サポートネットワークにおけるサポートの違いや共通点について考察を行う。

1．方法

1.1 対象者

サークル調査グループは、神奈川県横浜市内の三つ

の区（A区、B区、C区）で活動している、親子での遊びや親子同士の交流を主な目的とした親主体の子育てサークル29団体に所属する親メンバー307名（女性307名；平均年齢33.53歳；子どもの平均数1.64人；第一子平均年齢4.09歳）によって構成された。一方、ネット調査グループは、インターネット上での育児情報の提示を主な目的とする14の育児関連サイト内のネット掲示板に定期的に書き込んだり書き込みを閲覧している親217名（女性203名、性別未回答14名；平均年齢は31.67歳；子どもの平均数1.46人、第一子平均年齢3.53歳）であった。

1.2 用具

本研究では、地域の子育てサークルに所属するメンバーを対象にしたサークル調査用とオンライン育児関連サイトのネット掲示板利用者を対象にしたウェブ調査用の二種類の質問紙を用意した。二つの質問紙は共に、(a)回答者の性別、年齢、子どもの数及び年齢、婚姻状況、職業形態、最終学歴から成るフェイスシート、(b)利用しているネットワーク形態（子育てサークルあるいはネット掲示板）について、その利用歴や利用方法、利用動機、利用満足度及びその形態がもつサポート機能、(c)他方のネットワーク形態の利用状況、そして(d)回答者の現在の心理的健康及びサポート環境についての質問項目から主に構成された。

1.3 手続き

本調査実施の許可を得られた横浜市内の三区（A区、B区、C区）の子育てサークル29団体を2003年7月から10月にかけてそれぞれ一回ずつ訪問し質問紙を配布、配布した398部のうち307部を後日郵送にて回収した（回収率77.14%）。一方、オンライン育児関連サイトの掲示板利用者に対するウェブアンケートについては、協力を得られた14の育児サイトを介して調査協力者を募り、2003年9月から10月にかけて調査を実施した。

2．結果[1]

2.1 サポート機能及び心理的健康に関する質問紙項目の探索的因子分析と各項目群のまとまりについてのグループ別信頼性分析

二つの質問紙から得られたデータをもとにグループ間比較を実施するにあたって、まず、利用形態（i.e., サークルあるいはネット掲示板）のサポート機能及び回答者の現在の心理的健康に関する質問紙項目について両グループを統合した524名のサンプルを用いて主因子法・プロマックス回転による探索的因子分析を行い、抽出された項目のまとまり（i.e., 因子）についてグループ別にその信頼性を確認した。

A．サポート機能項目の探索的因子分析及び各グループにおける因子の信頼性分析

サポート機能についての24項目からは4つの因子が抽出された（***視野拡大、ゆとり、支えあい、客体化***）。各変数の因子負荷量は表1のとおりである。【表1挿入（縮尺率100%）】

B．心理的健康項目の探索的因子分析

回答者の心理的健康を尋ねる29項目については、「親効力感」「親満足感」「親子の愛着」など親役割に関するものと、「他者との関係」「自己肯定感」など個のあり方に関するものとで別々に探索的因子分析を行った。その結果、親役割に関連した項目からは3つの因子が抽出された（***親業充実感、親業価値意識、親業効力感***）。各変数の因子負荷量は表2のとおりである。【表2挿入（縮尺率100%）】

一方、個のあり方に関する項目からは2つの因子が抽出された（***人間関係の良好さ、自己充足感***）。各変数の因子負荷量は表3のとおりである。【表3挿入（縮尺率100%）】

2.2 変数の平均スコアのグループ間比較

次に、サークル調査グループとネット調査グループ間で比較可能な項目あるいは項目群について各変数スコアの平均値をグループ間で比較するため、合計21回の独立したT検定及び計4回のカイ二乗検定を実施した。この分析に含まれた変数及び各検定の結果は以下のとおりである。

A．フェイスシート項目に関連した変数及びそのグループ間比較の結果

フェイスシート項目に関連した変数のうち、サークル調査グループの方がネット調査グループよりも有意に親の年齢が高く［$t(306) = 4.87$, $p < .01$］、子どもの数が多かった［$t(307) = 2.94$, $p < .01$］。職業形態については、ネット調査グループの方がサークル調査グループよりも有意に有職傾向が強かった［$t(203) = 7.68$, $p < .01$］。回答者の第一子の年齢及び最終学歴については、グループ間で有意な差が見られなかった

表１．サポート機能項目の主因子法・プロマックス回転による探索的因子分析から得られた各変数の因子負荷量（N = 524）

項目	$F1^a$	$F2$	$F3$	$F4$
社会とのつながりを意識するようになった	.88	.05	-.21	-.12
社会とのつながりを感じる	.75	-.07	.00	-.09
一人の人間として視野が広がり、成長できた	.65	.08	-.07	.14
親としての視野が広がり、成長できた	.55	.05	.19	.04
子ども全般について学べる	.52	-.01	.03	.12
自分の子を新たな目で見られる	.44	.00	.13	.10
子育てについて学ぶことができる	.41	-.04	.05	.31
親として自信がついた／自信をなくした	-.02	.86	-.06	-.05
不安や焦り、イライラが減り育児に余裕ができた／不安や焦り、イライラが増し余裕をなくした	-.07	.77	.08	-.01
育児を負担に感じなくなった／感じるようになった	-.04	.74	-.03	.05
一人の人間として自信がついた／自信をなくした	.17	.64	-.10	-.02
人間関係のストレスが減った／増した	.02	.46	.08	.05
お互いの悩みにアドバイスしたり、励まし合う	-.08	-.03	.91	-.04
育児をする上で役立つ情報をやりとりする	-.01	.02	.82	-.12
自分の本音を出すことができる	-.07	-.01	.61	.17
情報や励ましが一番必要な時にそれを得られる	.05	.09	.44	.26
いろいろな生き方があると感じる	-.01	.03	-.20	.74
自分と同じ悩みを持つ人が他にもいると感じる	-.21	.04	.10	.66
いろいろな育児の仕方があると感じる	.07	.03	.03	.49
自分を客観的に振り返られる	.23	.04	.06	.40

[a] 因子ラベル：$F1$－視野拡大、$F2$－ゆとり、$F3$－支えあい、$F4$－客体化

表２．親役割に関連した心理的健康項目の主因子法・プロマックス回転による探索的因子分析から得られた各変数の因子負荷量（N = 524）

項目	$F5^a$	$F6$	$F7$
自分の子と私は相性が悪いのではと思う時がある*	.66	.07	-.14
自分の子のために色々な事をしても、子どもには私の気持ちがほとんど通じていないのではないかと思う時がある*	.61	.07	-.10
子どもと一緒にずっと家にいるのは辛い*	.57	-.09	.05
周りの多くの親よりも親であることを楽しんでいる	.41	.16	.26
私の才能も興味も育児以外のことにある*	.40	.09	-.06
私の毎日は変わりばえがなく、一日の終わりに達成感を感じることはあまりない*	.40	.01	.05
子どもがいると自分の自由が制限される*	.36	-.18	.10
親であることに緊張や不安を感じる*	.35	-.10	.21
親であることは人生で一番重要なことである	-.18	.75	.09
どんな犠牲をはらってでも子どもをもつことには価値がある	-.02	.57	-.03
自分の子どもによい家庭を提供できることは私にとって大きな喜びである	.18	.43	-.02
親であることはそんなに大変ではなく、どんな問題も簡単に解決できる	-.04	-.05	.69
子どもの問題について私こそが答えを見つけられる	-.06	.06	.56
私は新米ママ（パパ）がよい母親（父親）になるためのよい手本になれる	.05	.05	.52

[a]因子ラベル：$F5$－親業充実感、$F6$－親業価値意識、$F7$－親業効力感

表３．個のあり方に関連した心理的健康項目の主因子法・プロマックス回転による探索的因子分析から得られた各変数の因子負荷量（N = 524）

項目	$F8^a$	$F9$
他の人たちから孤立している*	.80	-.11
他人との間に壁を作っている*	.78	-.12
まわりの人たちと共通点が多い	.60	-.03
私をよく知っている人は誰もいない*	.59	.00
人間関係をわずらわしいと感じる*	.58	-.01
自分から友人に話しかけていく	.57	.11
親密感をもてる人たちがいる	.55	.06
人前でもありのままの自分を出せる	.55	.09
私は情熱をもって何かに取り組んでいる	-.20	.86
充実感を感じている	.06	.79
私は前向きに物事に取り組んでいる	.07	.79
生活がすごく楽しいと感じる	.17	.60
自分のよいところも悪いところも、ありのままに認めることができる	.11	.40

[a]因子ラベル：$F8$－人間関係の良好さ、$F9$－自己充足感

［それぞれ順に$t(307) = 1.86$, ns；$t(202) = 1.33$, ns］。職業形態については、サークル調査グループの方がネット調査グループよりも専業主婦が多く、パート／アルバイトそしてフルタイムの就業者についてはその逆のパターンが見られた［$\chi^2(4) = 88.92$, $p<.01$］。【表4及び表5挿入（縮尺率100%）】

B．各形態の利用についての項目に関連した変数及びそのグループ間比較の結果

利用歴についてはグループ間の有意差はなかったものの［$t(306) = .53$, ns］、利用している形態に対しての満足度はサークル調査グループの方がネット調査グループよりも満足度が有意に高かった［$t(304) = -2.73$, $p<.01$］。利用動機については、サークル調査グループの方がネット調査グループよりも「自分の話し相手や仲間が欲しかったから」などの自己中心動機が強く［$\chi^2(1) = 87.05$, $p<.01$］、ネット調査グループの方がサークル調査グループよりも「他の親子の様子が知りたかったから」などの他者中心的動機及び「育児情報を入手したかったから」などの情報中心的動機が強い傾向が見出された［順に$\chi^2(1) = 121.44$, $p<.01$；$\chi^2(1) = 91.02$, $p<.01$］。【表6及び表7挿入（縮尺率100%）】

C．各形態のサポート機能項目に関連した変数及びそのグループ間比較の結果

サポート機能については、先の探索的因子分析より得られた4つの項目群（i.e., 因子）を、負荷量が0.35以上の変数のスコアを単純平均した合成変数として扱い、それぞれをグループ間で比較することとした。各形態のサポート機能項目に関連した変数のうち、サークル調査グループの方がネット調査グループよりも利用形態の視野の拡大と支えあいの機能を有意に高く評価しているのに対し［それぞれ順に$t(307) = -3.57$, $p<.01$；$t(307) = -4.46$, $p<.01$］、ネット調査グループの方がサークル調査グループよりもゆとりと客体化の機能を高く評価していることが分かった［それぞれ順に$t(217) = 2.14$, $p<.05$；$t(217) = 6.06$, $p<.01$］。【表8挿入（縮尺率100%）】

D．回答者の心理的健康に関連した変数及びそのグループ間比較の結果

サポート機能項目同様、回答者の心理的健康項目についても先の探索的因子分析より得られた5つの項目群（i.e., 因子）を、負荷量が0.35以上の変数のスコアを単純平均した合成変数として扱い、それぞれをグループ間で比較することとした。回答者の心理的健康

表4．フェイスシート項目に関連した変数のグループ別平均値及びT検定の結果

変数名	グループ	*N*	M	*SD*	*t*
親の年齢	サークル	306	33.53	3.78	4.87**
	ネット	203	31.67	4.48	
子どもの数	サークル	307	1.64	.70	2.94**
	ネット	202	1.46	.66	
第一子の年齢	サークル	307	4.09	2.62	1.86
	ネット	202	3.53	3.78	
最終学歴[a]	サークル	307	3.45	1.11	-1.33
	ネット	202	3.59	1.31	

[a]最小値1（中学校卒）／最大値6（大学院卒）
** $p<.01$

表5．職業形態についてのグループ別度数分布及びカイ二乗検定の結果

変数名	レベル	グループ：サークル	ネット	合計	
職業形態	専業主婦	293 (9.3)	129 (-9.3)	422	$\chi^2 = 88.92$**
	パート／アルバイト	7 (-4.3)	23 (4.3)	30	
	フルタイム	1 (-5.3)	20 (5.3)	21	
	合計	301	172	473	

注釈。（　）内は調整済み残差
** $p<.01$

表6．各形態の利用についての項目に関連した変数のグループ別平均値及びT検定の結果

変数名	グループ	*N*	*M*	*SD*	*t*
利用歴[a]	サークル	306	2.35	1.25	.53
	ネット	217	2.29		
利用満足度[b]	サークル	304	1.85	.65	-2.73**
	ネット	217	2.02	.75	

[a] 最小値1（半年以内）／最大値4（二年以上）
[b] 最小値1（とても満足）／最大値5（とても不満）
** $p<.01$

表7．ネットワークの利用動機についてのグループ別度数分布及びカイ二乗検定の結果

変数名	レベル		グループ サークル	ネット	合計	
自己中心動機	ある		190	45	235	
	ない		117	172	289	$\chi^2=87.05$**
		合計	307	217	524	
他者中心動機	ある		60	146	206	
	ない		247	71	318	$\chi^2=121.44$**
		合計	307	217	524	
情報中心動機	ある		114	172	286	
	ない		193	45	238	$\chi^2=91.02$**
		合計	307	217	524	

** $p<.01$

表8．各形態のサポート機能項目に関連した変数のグループ別平均値及びT検定の結果

変数名	グループ	*N*	*M*	*SD*	*t*
視野の拡大[a]	サークル	307	2.21	.53	-3.57**
	ネット	217	2.38	.56	
ゆとり[b]	サークル	306	2.60	.49	2.14*
	ネット	217	2.50	.51	
支えあい[a]	サークル	307	2.01	.60	-4.46**
	ネット	217	2.30	.80	
客体化[a]	サークル	307	1.93	.53	6.06**
	ネット	217	1.66	.50	

[a] 最小値1（あてはまる）／最大値4（あてはまらない）
[b] 最小値1（そうである）／最大値5（逆である）
* $p<.05$ ** $p<.01$

項目に関連した変数のうち、サークル調査グループの方がネット調査グループよりも親業価値意識が高く［$t(307)=-3.07$, $p<.01$］、他者関係をより好意的に評価している［$t(306)=-4.57$, $p<.01$］一方で、自己充足感についてはネット調査グループの方がサークル調査グループよりも高い［$t(203)=2.30$, $p<.05$］という結果が得られた。親業充実感及び親業効力感についてはグループ間に有意な差が見られなかった［それぞれ順に$t(307)=-1.60$, ns；$t(307)=1.09$, ns］。【表9挿入（縮尺率100%）】

E．回答者のサポート環境項目に関連した変数及びそのグループ間比較の結果

サークル調査グループの方がネット調査グループよりも配偶者のサポート、そして育児仲間や友人からのサポートを高く評価していることが分かった［それぞれ順に$t(306)=3.99$, $p<.01$；$t(306)=8.90$, $p<.01$］。しかしながら、そのほかのサポート源についてはグループ間での有意差は見られなかった。【表10挿入（縮尺率100%）】

2.3 心理的変数と状況的変数との関連の検討

次に、それぞれのグループについて、親子の年齢及び子どもの数、職業形態、最終学歴、そしてその形態の利用歴を含む回答者の状況的変数と、回答者自身が評価する利用動機や利用満足度、形態のサポート機能、回答者の心理的健康、そしてサポート環境を含む心理的変数との間にどのような関連が見られるかを、連続変数同士では二偏量相関、二項変数と連続変数ではT検定、そしてカテゴリー変数同士ではカイ二乗検定によって探った。

表９．回答者の心理的健康項目に関連した変数のグループ別平均値及びT検定の結果

変数名	グループ	N	*M*	*SD*	*t*
親業充実感[a]	サークル	307	2.27	.44	-1.60
	ネット	203	2.35	.52	
親業価値意識[a]	サークル	307	1.96	.58	-3.07**
	ネット	203	2.13	.61	
親業効力感[a]	サークル	307	3.04	.53	1.09
	ネット	203	2.99	.59	
人間関係の良好さ[a]	サークル	306	1.96	.46	-4.57**
	ネット	203	2.16	.51	
自己充足感[a]	サークル	306	2.28	.54	2.30*
	ネット	203	2.15	.66	

[a] 最小値１（そう思う）／最大値４（そう思わない）
* $p<.05$　** $p<.01$

表10．サポート環境項目に関連した変数のグループ別平均値及びT検定の結果

変数名	グループ	*N*	*M*	*SD*	*t*
配偶者サポート[a]	サークル	306	6.84	1.08	3.99**
	ネット	203	6.43	1.16	
実家の親サポート[a]	サークル	306	6.25	1.47	1.48
	ネット	203	6.05	1.47	
配偶者の親サポート[a]	サークル	306	5.10	1.39	1.48
	ネット	203	4.93	1.21	
育児仲間・友人サポート[a]	サークル	306	6.70	1.19	8.90**
	ネット	203	5.79	1.09	
近所の知り合いサポート[a]	サークル	306	4.59	1.07	.07
	ネット	203	4.58	1.09	
兄弟姉妹・親戚サポート[a]	サークル	306	4.73	1.17	.53
	ネット	203	4.67	1.14	

[a] 最小値４（サポート少）／最大値８（サポート多）
** $p<.01$

A．サークル調査グループ

サークル調査グループのデータを基に、職業形態を除いた状況的変数と利用動機以外の心理的変数との二変量相関、職業形態以外の状況的変数をそれぞれの利用動機の有無で比較したT検定の結果は以下のようなものであった。すなわち、サークルに対する満足度、サークルの視野拡大機能、ゆとり機能、支えあい機能は全てサークル参加歴の長さとプラスに関連しており、[順に $r(303) = .16$, $p<.05$；$r(306) = .26$, $p<.01$；$r(305) = .23$, $p<.01$；$r(306) = .30$)、これはつまり、サークルへの参加歴が長いほど、サークル満足度そしてサークルの視野拡大機能、ゆとり機能、そして支えあい機能を高く評価する傾向があることを意味する。サークルの客体化機能はサークル参加歴とプラスに関連する [$r(306) = .22$, $p<.01$] 一方で親の年齢とはマイナスに関連しており [$r(306) = -.13$, $p<.05$]、サークルへの参加歴が長いほど、あるいは親の年齢が低いほどサークルの客体化機能が高く評価されることが分かる。親業充実感はサークルメンバーの子どもの数と第一子の年齢とそれぞれマイナスの関連があり [$r(306) = -.12$, $p<.05$；$r(306) = -.14$, $p<.05$]、メンバーの子どもの数が少ない、あるいは第一子の年齢が低いほど親業充実感を高く評価していることを意味する。自己充足感に関しては最終学歴の高さとプラスの関連をもっており [$r(306) = .16$, $p<.05$]、最終学歴が高いほど自己充足感を高く評価する傾向が伺える。サポート環境については、配偶者からのサポートは第一子の年齢とマイナスの関連をもち [$r(306) = -.12$, $p<.05$]、育児仲間／友人からのサポートは子どもの数及び第一子の年齢、そしてサークルへの参加歴とプラスの関連があり [それぞれ順に $r(306) = .19$, $p<.01$；$r(306) = .15$, $p<.05$；$r(305) = .25$, $p<.01$]、近所の知り合いからのサポートは子どもの数とプラスの関連があった [$r(306) = .15$, $p<.05$]。すなわち、第一子の年齢が低いほど配偶者からのサポートが高く評価され、子どもの数が多い、あるいは第一子の年齢が高い、またはサークルへの参加歴が長いほど育児仲間／友人からのサポートが高く評価され、子どもの数が多いほど近所の知り合いからのサポートが高く評価される傾向にあった。

サークルへの参加動機と（職業形態以外の）状況変

数の関連については、自己中心動機をもってサークルに加入する人はそのような動機をもたない人と比べて有意に子どもの数が少なく［$t(190) = -2.37$, $p<.05$］、第一子の年齢が低かった［$t(190) = -3.09$ $p<.01$］。同様に、他者中心動機をもつ人はそれをもたない人よりも有意に子どもの数が少なく［$t(60) = -2.61$, $p<.05$］、第一子の年齢が低かった［$t(60) = -3.06$ $p<.01$］。また、情報動機をもってサークルに加入する人はそうでない人と比べて有意に親子の年齢が低く［親子の順に$t(114) = -2.42$, $p<.05$；$t(114) = -3.93$ $p<.01$］、子どもの数も少なかった［$t(114) = -4.02$, $p<.01$］。【表11及び表12挿入（縮尺率100%）】

B．オンライン調査グループ

ネット調査グループのデータを基に、職業形態を除いた状況的変数と利用動機以外の心理的変数との二偏量相関、利用動機以外の心理的変数を職業形態別に比較した分散分析、職業形態以外の状況的変数をそれぞれの利用動機の有無で比較したT検定、そして職業形態×動機の有無でクロス分析を行った結果は以下の通りである。すなわち、ネット掲示板の支えあい機能及び掲示板利用者の親業価値意識は親の年齢とそれぞれマイナスの関連が見られ［順に$r(203) = -.17$, $p<.05$；$r(203) = -.15$, $p<.05$］、これは、親の年齢が低いほどネット掲示板の支えあい機能あるいは自分自身の親業価値意識を強く認識していることを意味する。また、客体化機能は回答者の年齢及び最終学歴とマイナスの関連をもっており［順に$r(203) = -.19$, $p<.01$；$r(203) = .15$, $p<.05$］、親の年齢が低いほど、あるいは最終学歴が低いほどネット掲示板の客体化機能が高く評価されていることが分かる。親業充実感もまた掲示板利用歴とマイナスの関連をもっており［$r(203) = -.15$, $p<.05$］、これはつまり、ネット掲示板の利用歴が短いほど、親業充実感が強く認識されていることを意味する。同様に、親業価値意識も親の年齢とマイナスの関連があり［$r(203) = -.15$, $p<.05$］、親の年齢が低いほど親業価値意識が高いことが分かる。自己充足感は最終学歴とプラスの関連が見られ［$r(202) = .17$, $p<.05$］、これは最終学歴が高いほど自己充足感を高く評価する傾向を示している。サポート環境については、実家の親からのサポートは子どもの数と第一子の年齢とそれぞれマイナスの関連［順に$r(202) = -.20$, $p<.01$；$r(202) = -.14$, $p<.05$］、育児仲間／友人からのサポートは親の年齢とプラスの関連［$r(203) = .15$, $p<.05$］、近所の知り合いからのサポートは第一子の年齢とプラスの関連［$r(202) = .16$, $p<.05$］が示されている。つまり、子どもの数が少ないほど、あるいは第一子の年齢が低いほど実家の親からのサポートが高く評価され、親の年齢が高いほど育児仲間／友人からのサポートが高く評価され、第一子の年齢が高いほど近所の知り合いからのサポートが高く評価されることを示している。また、表7.2にあるように、職業形態の下位カテゴリー間で有意な差が見られた心理的変数は育児仲間／友人からのサポートのみであった［$F(2, 169) = 5.65$, $p<.01$］。この結果についてその後の検定で多重比較を行った結果、フルタイム就労者は専業主婦及びパート／アルバイト就労者と比べて育児仲間や友人からのサポートを有意に低く評価していることがわかった。

ネットワークの利用動機と状況的変数の関連については、表7.3に動機の有無による状況的変数スコアの差の検定結果（T検定）、そして表7.4に動機の有無×職業形態のクロス分析の結果を示してある。これらの表から分かるように、自己中心動機をもってネット掲示板を利用する人はそのような動機をもたない人と比べて有意に最終学歴が低い傾向にあり［$t(45) = -2.32$, $p<.05$］、情報中心動機をもつ掲示板利用者はそうでない利用者よりも第一子の年齢が低かった［$t(161) = -2.16$, $p<.05$］。また、職業形態は自己中心的、他者中心的、情報中心的のうちいずれのネットワーク利用動機の有無とも有意な関連が見られなかった［順に$\chi^2(2) = 5.51$, ns；$\chi^2(2) = .47$, ns；$\chi^2(2) = .28$, ns］。【表13～16挿入（縮尺率100%）】

3．考察

本研究の目的は、地域の子育てサークルとインターネット上における育児期の親同士のネットワークがサポートを提供する場としてそれぞれどのように機能しているのかを比較検討することであった。そして、回答者の属性やネットワークの利用動機、そこで体験しているサポート機能、そして現在の身近なサポート環境や回答者の心理的健康をサークル調査グループとネット調査グループとの間で探索的に比較することを目的に、変数スコアの平均値比較（i.e., 独立したT検定及び一元配置分散分析）や度数分布の比較（i.e., カイ二乗検定）を行った結果、ネット調査グループの方がサークル調査グループよりも有意に親及び第一子の年齢が低く、利用者が有職である割合が高いことが分かった。また、育児サークルやネット掲示板のような

表11．サークル調査グループにおける状況的変数とサポート機能、心理的健康、サポート環境変数との単相関

変数名	親年齢	子どもの数	第一子年齢	最終学歴[f]	利用歴[g]
利用満足度[a]	.01	.05	.02	-.01	-.16*
	(303)	(304)	(304)	(304)	(303)
視野拡大[b]	.06	.04	-.03	.08	-.26**
	(306)	(307)	(307)	(307)	(306)
ゆとり[c]	.07	.00	-.01	-.05	-.23**
	(305)	(306)	(306)	(306)	(305)
支えあい[b]	.10	.10	.07	-.04	-.30**
	(306)	(307)	(307)	(307)	(306)
客体化[b]	.13*	.08	.05	.09	-.22**
	(306)	(307)	(307)	(307)	(306)
親業充実感[d]	.07	.12*	.14*	-.04	.01
	(305)	(306)	(306)	(306)	(305)
親業価値意識[d]	-.06	-.06	-.06	.08	.01
	(306)	(307)	(307)	(307)	(306)
親業効力感[d]	.07	-.03	-.06	-.04	.00
	(306)	(307)	(307)	(307)	(306)
人間関係[d]	.02	.06	.07	-.09	-.09
	(305)	(306)	(306)	(306)	(305)
自己充足感[d]	-.03	-.01	-.01	-.16*	-.10
	(305)	(306)	(306)	(306)	(305)
配偶者サポート[e]	.03	-.07	-.12*	.04	-.07
	(305)	(306)	(306)	(306)	(305)
実家親サポート[e]	-.16**	-.08	-.11	-.05	.02
	(305)	(306)	(306)	(306)	(305)
配偶者親サポート[e]	.05	.11	.05	-.06	-.01
	(305)	(306)	(306)	(306)	(305)
育児仲間サポート[e]	.09	.19**	.15*	.00	.25**
	(305)	(306)	(306)	(306)	(305)
知り合いサポート[e]	.02	.15*	.09	-.03	.10
	(305)	(306)	(306)	(306)	(305)
兄弟親戚サポート[e]	-.06	-.05	-.07	-.11	-.04
	(305)	(306)	(306)	(306)	(305)

注釈。（　）内は分析に使用されたサンプル数。
[a] 最小値１（とても満足）／最大値５（とても不満）
[b] 最小値１（あてはまる）／最大値４（あてはまらない）
[c] 最小値１（そうである）／最大値５（逆である）
[d] 最小値１（そう思う）／最大値４（そう思わない）
[e] 最小値４（サポート少）／最大値８（サポート多）
[f] 最小値１（中学校卒）／最大値６（大学院卒）
[g] 最小値１（半年以内）／最大値４（二年以上）
* $p<.05$　** $p<.01$

表12．サークル調査グループのネットワーク利用動機の有無による状況的変数についての平均値の比較

変数名	動機の有無		*N*	*M*	*SD*	*t*
親年齢	自己中心動機	あり	190	33.36	3.67	-1.00
		なし	116	33.81	3.95	
	他者中心動機	あり	60	33.25	3.98	-.65
		なし	246	33.60	3.73	
	情報中心動機	あり	114	32.86	4.02	-2.42*
		なし	192	33.93	3.58	
子ども数	自己中心動機	あり	190	1.57	.68	-2.37*
		なし	117	1.76	.71	
	他者中心動機	あり	60	1.43	.56	-2.61*
		なし	247	1.69	.72	
	情報中心動機	あり	114	1.44	.62	-4.02**
		なし	193	1.76	.71	
第一子の年齢	自己中心動機	あり	190	3.74	2.51	-3.09**
		なし	117	4.67	2.69	
	他者中心動機	あり	60	3.18	2.45	-3.06**
		なし	247	4.31	2.61	
	情報中心動機	あり	114	3.35	2.42	-3.93**
		なし	193	4.53	2.63	
最終学歴[a]	自己中心動機	あり	190	3.54	1.11	1.84
		なし	117	3.30	1.09	
	他者中心動機	あり	60	3.55	1.11	.81
		なし	247	3.42	1.10	
	情報中心動機	あり	114	3.46	1.16	.12
		なし	193	3.44	1.07	
利用歴[b]	自己中心動機	あり	189	2.42	1.24	1.25
		なし	117	2.24	1.26	
	他者中心動機	あり	60	2.28	1.25	-.48
		なし	246	2.37	1.25	
	情報中心動機	あり	114	2.38	1.24	.26
		なし	192	2.34	1.26	

[a] 最小値１（中学校卒）／最大値６（大学院卒）
[b] 最小値１（半年以内）／最大値４（二年以上）
* $p<.05$　** $p<.01$

表13．ネット調査グループにおける状況的変数とサポート機能、心理的健康、サポート環境変数との単相関

変数名	親年齢	子どもの数	第一子年齢	最終学歴[f]	利用歴[g]
利用満足度[a]	.04	.01	.03	.05	.01
	(203)	(202)	(202)	(202)	(217)
視野拡大[b]	.08	−.04	−.09	.08	−.05
	(203)	(202)	(202)	(202)	(217)
ゆとり[c]	.10	.09	.08	−.08	.01
	(203)	(202)	(202)	(202)	(217)
支えあい[b]	.17*	.02	.07	.04	.03
	(203)	(202)	(202)	(202)	(217)
客体化[b]	.19**	−.04	−.01	.15*	.01
	(203)	(202)	(202)	(202)	(217)
親業充実感[d]	−.02	.14	.04	−.06	.15*
	(203)	(202)	(202)	(202)	(203)
親業価値意識[d]	.15*	.05	.13	−.07	.12
	(203)	(202)	(202)	(202)	(203)
親業効力感[d]	−.05	.02	−.11	−.02	.05
	(203)	(202)	(202)	(202)	(203)
人間関係[d]	.06	.04	.03	−.07	.12
	(203)	(202)	(202)	(202)	(203)
自己充足感[d]	−.04	.06	−.04	−.17*	−.03
	(203)	(202)	(202)	(202)	(203)
配偶者サポート[e]	−.01	.00	−.02	.10	−.05
	(203)	(202)	(202)	(202)	(203)
実家親サポート[e]	−.09	−.20**	−.14*	.12	−.07
	(203)	(202)	(202)	(202)	(203)
配偶者親サポート[e]	−.11	−.04	−.05	.01	−.04
	(203)	(202)	(202)	(202)	(203)
育児仲間サポート[e]	.15*	.01	.07	.11	.08
	(203)	(202)	(202)	(202)	(203)
知り合いサポート[e]	.10	.14	.16*	−.01	.10
	(203)	(202)	(202)	(202)	(203)
兄弟親戚サポート[e]	.01	.02	−.06	−.09	.04
	(203)	(202)	(202)	(202)	(203)

注釈。（　）内は分析に使用されたサンプル数。
[a] 最小値１（とても満足）／最大値５（とても不満）
[b] 最小値１（あてはまる）／最大値４（あてはまらない）
[c] 最小値１（そうである）／最大値５（逆である）
[d] 最小値１（そう思う）／最大値４（そう思わない）
[e] 最小値４（サポート少）／最大値８（サポート多）
[f] 最小値１（中学校卒）／最大値６（大学院卒）
[g] 最小値１（半年以内）／最大値４（二年以上）
* $p<.05$　** $p<.01$

表14．ネット調査グループにおける職業形態（専業主婦；パート／アルバイト；フルタイム）間でのサポート機能、心理的健康、そしてサポート環境変数についての平均値の比較

変数名	ソース	*SS*	*df*	*MS*	*F*
利用満足度	職業形態間	1.28	2	.64	1.22
	誤差	88.72	169	.53	
視野拡大	職業形態間	.49	2	.25	.79
	誤差	52.79	169	.31	
ゆとり	職業形態間	.35	2	.18	.70
	誤差	42.25	169	.25	
支えあい	職業形態間	1.32	2	.66	1.06
	誤差	105.11	169	.62	
客体化	職業形態間	.35	2	.18	.70
	誤差	42.05	169	.25	
親業充実感	職業形態間	.08	2	.04	.01
	誤差	49.22	169	.29	
親業価値意識	職業形態間	.32	2	.16	.43
	誤差	62.54	169	.37	
親業効力感	職業形態間	.72	2	.36	1.05
	誤差	57.72	169	.34	
人間関係	職業形態間	.22	2	.11	.45
	誤差	41.97	169	.25	
自己充足感	職業形態間	1.95	2	.97	2.28
	誤差	72.12	169	.43	
配偶者サポート	職業形態間	.32	2	.16	.12
	誤差	228.35	1691	.35	
実家親サポート	職業形態間	1.57	2	.79	.36
	誤差	374.43	169	2.22	
配偶者親サポート	職業形態間	6.13	2	3.07	2.11
	誤差	245.77	169	1.45	
育児仲間サポート	職業形態間	13.89	2	6.94	5.65**
	誤差	207.86	169	1.23	
知り合いサポート	職業形態間	.59	2	.30	.24
	誤差	212.92	169	1.26	
兄弟親戚サポート	職業形態間	.34	2	.17	.13
	誤差	224.33	169	1.33	

** $p<.01$

表15．ネット調査グループのネットワーク利用動機の有無による状況的変数についての平均値の比較

変数名	動機の有無		*N*	*M*	*SD*	*t*
親年齢	自己中心動機	あり	45	31.00	4.48	-1.15
		なし	158	31.87	4.48	
	他者中心動機	あり	139	31.32	4.46	-1.69
		なし	64	32.45	4.45	
	情報中心動機	あり	162	31.62	4.43	-.32
		なし	41	31.88	4.74	
子ども数	自己中心動機	あり	45	1.51	.66	.59
		なし	157	1.45	.65	
	他者中心動機	あり	139	1.47	.66	.23
		なし	63	1.44	.64	
	情報中心動機	あり	161	1.42	.65	-1.64
		なし	41	1.61	.67	
第一子の年齢	自己中心動機	あり	45	3.40	2.52	-.34
		なし	157	3.56	4.07	
	他者中心動機	あり	139	3.41	3.72	-.63
		なし	63	3.77	2.81	
	情報中心動機	あり	161	3.24	3.50	-2.16*
		なし	41	4.65	4.58	
最終学歴[a]	自己中心動機	あり	45	3.20	1.32	-2.32*
		なし	157	3.71	1.28	
	他者中心動機	あり	138	3.59	1.29	.00
		なし	64	3.59	1.34	
	情報中心動機	あり	161	3.61	1.31	.32
		なし	41	3.54	1.31	
利用歴[b]	自己中心動機	あり	45	2.13	1.24	-1.00
		なし	172	2.34	1.21	
	他者中心動機	あり	146	2.36	1.22	1.18
		なし	71	2.15	1.20	
	情報中心動機	あり	172	2.37	1.20	1.70
		なし	45	2.02	1.25	

[a] 最小値１（中学校卒）／最大値６（大学院卒）
[b] 最小値１（半年以内）／最大値４（二年以上）
* $p<.05$　** $p<.01$

表16．ネット調査グループにおけるネットワーク利用動機の職業形態別度数分布及びカイ二乗検定の結果

変数名	レベル	職業形態 専業主婦	パート／アルバイト	フルタイム	合計	
自己中心動機	ある	96	1	6	103	
	ない	33	22	14	69	$\chi^2=5.51$
		合計129	23	20	172	
他者中心動機	ある	87	17	13	117	
	ない	42	6	7	55	$\chi^2=.47$
		合計129	23	20	172	
情報中心動機	ある	101	17	15	133	
	ない	28	6	5	39	$\chi^2=.28$
		合計129	23	20	172	

人工的な子育てネットワークに参加するにあたって、サークル調査グループはネット調査グループよりも自分の育児仲間を見つけたいという動機が強く、ネット調査グループはサークル調査グループよりも他の親の育児について知りたい、あるいは育児に関する情報が欲しいという動機が強かった。それぞれのネットワークがもつサポート機能については、視野の拡大と支え合い機能はサークル調査グループにおいて、客体化とゆとり機能はネット調査グループにおいて、他方のグループよりも有意に高く評価される傾向にあった。回答者の現在の心理的健康については、サークル調査グループの方がネット調査グループよりも親役割に対する価値意識が高く、また、自分と他者との関わりを肯定的に評価していた一方で、親役割を離れた個としての自己充足感については、ネット調査グループの方が強くもっているというパターンが見出された。ただし、

親役割についての充実感や効力感に関するグループ間での有意差は見られなかった。回答者の身近なサポート環境については、サークル調査グループの方がネット調査グループよりも配偶者及び育児仲間・友人からの育児サポートを有意に高く評価しており、利用しているネットワーク形態に対する満足度においても同様にサークル調査グループの方が高い傾向にあった。

これらの結果から、地域の子育てサークルとインターネット上の育児掲示板という二つのネットワーク形態を比較した時に、育児サークルの方は、子育てをある程度経験した親が既存のネットワークを広げる目的で参加し、コミュニティ的な支え合いや、親子同士の交流を通じた親や個人として視野の広がりを経験する機会を提供する場として特徴付けられるのに対して、インターネット上の育児掲示板は、育児経験の浅い親が育児情報を手に入れたりよその親の子育ての様子を知りたいというニーズを満たすために利用し、親としての自分を客観的に見つめ直し育児にゆとりを持つ機会が得られる場として捉えられていることが示唆される。そしてこのことは、本論文の始めに述べたそれぞれのネットワークについての理論的仮説とほぼ合致しているといえる。

さらに、心理的健康に関する変数や身近な育児サポートについてのグループ間比較の結果も、所属グループを持つ母親がそのようなグループを持たない母親と比べて専業主婦としての生き方を受容しネットワークの広がりをもって生活しているという榎田と諏訪（2002）の研究結果や、インターネット上のサポートグループに属する親がそうでない親よりも家族が友人からのサポートをより低く評価する傾向にあったというMickelson (1997) の研究結果をおおよそ支持するものであるといえよう。しかしながら、榎田と諏訪（2002）やMickelson (1997) の研究結果に二通りの解釈が考えられるのと同じように、本研究の結果に関しても、サークル調査グループに見られた他者関係の良さ、親役割についての価値意識の高さ、そして配偶者及び育児仲間・友人からの育児サポートの高さ、あるいはネット調査グループに見られた自己充足感の強さが、それぞれのネットワーク形態を利用したことによる結果を反映しているのか、それともこれらのネットワークの利用のきっかけであるのか、はたまたネットワーク利用とは何ら関係のない、別の要因によって説明されるものなのかを結論付けるのは難しい。

例えば、グループ間で有意差が見られた育児仲間・友人からの育児サポートは、グループ内での変数分析の結果から、それが親の年齢や就業形態、第一子の年齢あるいは子どもの数と有意なプラスの相関があることが明らかになっているのだが、これらの親子属性もまたグループ間で有意差が見られることから、二つのグループ間での友人サポートの差は、利用しているネットワークの種類によるものではなく、単に育児経験の長さや就業形態の違いによるものであると見方も成り立つのである。実際、加藤（1999）の研究では、第一子の年齢の上昇に伴って育児初期の母親の「転居後友人サポート」が増加することが示されている。配偶者からのサポートや他者関係、親役割に対する価値意識、そして自己充足感については、グループ間の有意差を単なる親子属性の有意差で説明できるような変数同士の関連を見出すことはできないものの、それらがサークルあるいはネット掲示板の利用とどのように関係しているのか (i.e., 配偶者からのサポートの高さ、他者関係のよさ、親役割に対する価値意識の高さ、そして自己充足感の強さはサークル／ネット掲示板を利用した結果なのか、それとも利用する原因となっているのか）は、平均値の比較や変数同士の相関を見る限りでは明らかではない。

しかしながら、本研究の結果からは、地域の育児サークルとインターネット上の育児掲示板は、様々な側面において異質でありながらも、独自の有効性をもった子育てサポートネットワークであることが示唆されており、これらのネットワークを活用した親の子育てに対する効果的なサポートのあり方について、次のような可能性が提案できる。例えば、オンライン育児掲示板という新たなネットワーク形成の手段は、子育てサークルという従来の対面式サポートを代用するものではなく、お互いを補完する形で活用されるべきであるということが言える。つまり、従来の育児サークルでは得られにくい、親としての自分のあり方について考えたり他の親の育児について知る機会をオンラインネットワークから手に入れ、オンラインでの交流では難しい、密接な仲間関係や子育てについて学習する機会を対面式のネットワークで得ることで、親の育児に対するより多面的なサポートが望めると思われる。

地域の子育てサークルとオンラインの育児掲示板という二つの育児サポートネットワーク形成の場におけるサポートを並行的に検討し、両者の比較を試みた本研究は、理論の上だけで、あるいは一方のみの分析結果から他方を論じるにとどまっていた、「対面式サポートグループvs．オンラインサポートグループ」というトピックについての論争を新たに前進させる有意な貢

献であると思われる。その一方で、本研究で扱ったそれぞれのネットワーク形態のサポート機能や親の心理的健康の側面が四〜五の要素に限られていること、調査参加者の大多数が配偶者をもち、1〜2人の未就園児を抱えた主婦であるといった比較的同質の集団であることなどは、本研究の限界であるといえ、これらの問題点は今後同類の研究を行う際に打開されるべき課題であると考えられる。

注

1 本研究で行った統計的分析にはSPSS11.0を使い、全ての検定においてアルファ水準0.05に設定した。また、表中で「＊」のついた項目は本研究における逆転項目を示している。

文献

榎田二三子・諏訪きぬ．(2002)．子育て支援のあり方の再検討：育児ストレスと育児期ストレスの視点から．*保育学研究*，40(1)，37-45．

原田正文．(2000)．新しい地域子育て支援システムの構築をめざして．*発達*，8，53-55．

広野優子・山中龍宏．(1996)．育児不安への援助法についての検討：保健センターにおける母親のための「場」つくり．*平成8年度厚生省心身障害研究*，90-97．

Joinson, A. (2003). *Understanding the psychology of internet behaviour: Virtual worlds, real lives*. NewYork: Palgrave MacMillan.

神田直子・山本理絵．(2001)．乳幼児を持つ親の，地域子育て支援センター事業に対する意識に関する研究：子育て支援事業参加者と非参加者の比較から．*保育学研究*，39(2)，80-86．

加藤道代．(1999)．育児初期の母親の養育意識・行動とサポート資源．*国立婦人教育会館研究紀要*，3，53-59．

北川憲明・七木田敦・今塩屋隼男．(1995)．障害幼児を育てる母親へのソーシャルサポートの影響．*特殊教育学研究*，33(1)，35-44．

高祖常子．(2001)．子育てしやすい世の中にするために．*社会教育*，9，28-30．

Mickelson, K. D. (1997). Seeking social support: Parents in electronic support groups. In S. Kiesler (Ed.), *Culture of the Internet* (pp.157-178). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.

三沢直子．(1997)．子育てに対するソーシャルサポートの必要性：核家族・夫婦分業・母子密着による子育ての限界．*現代のエスプリ*，363，153-163．

中村敬．(2001)．地域における子育て支援ネットワーク構築に関する研究．*子ども家庭総合研究事業平成13年度研究報告書*．347-418．

日本小児保健協会．(2000)．*平成12年度幼児健康調査*．

鈴木久美子．(2001)．みんなで子育てネットワーク．日本女子社会教育会（編）．*おやオヤ？親子21世紀「家族をひらく」関係づくり*．日本女子社会教育会．

高橋貴志．(1997)．都市社会の特質と育児ネットワーク．*聖セシリア女子短期大学紀要*，22，35-41．

結城恵．(2001)．メンバーのサークルの関わり方とサークル活動への評価：子育てサークルの活性化のために．*国立女性教育会館研究紀要*，5，109-118．